国際シンポジウム 「Civilization Dialogue between Europe and Japan」

田中彰吾　東海大学総合教育センター

2015 年 11 月 13 ～ 14 日の二日間，「Civilization Dialogue between Europe and Japan」（欧日間の文明対話）と題する国際シンポジウムを東海大学ヨーロッパ学術センター（デンマーク）で開催した．現在，文明研究所では，東海大学全体の中期目標（2014 ～ 2018 年度）を受けて，国際レベルでの研究拠点の確立を目指し，さまざまな研究活動が進められている．今回の企画は，ヨーロッパに研究・教育施設を持つ本学の強みを活かして，欧州各地の研究者に講演者として来訪していただき，ヨーロッパ学術センターと文明研究所の共催という形で実現したものである．準備のため，半年前の 5 月に沓澤宣賢教授（文明研究所所長），平野葉一教授（本学副学長）を中心とする運営委員会が組織され，田中久博氏（ヨーロッパ学術センター所長代行），鷹取勇希氏（本学非常勤講師）とともに，私（田中彰吾）も運営委員として参加させていただいた．

シンポジウムのタイトルにある「Civilization Dialogue」（文明対話）というアイデアは，平野副学長によるものである．今日，世界の諸地域では，いわゆるポストコロニアル化の流れに沿って欧米の相対的な影響力が低下し，各地域に根ざす文明や文化のあり方が復興しつつある．その一方で，地球全体として見れば温暖化を始めとする地球環境問題が深刻化しており，国と地域を超えた協力はますます不可避になりつつある．そうした中で「持続可能な発展」を追求するには，たんに現実の政策的課題を解決するだけでなく，地球上の諸文明が蓄積してきた知恵を持ち寄り，自然と調和する社会と文明のあり方を模索することが重要であろう．このような問題意識のもとで日欧の研究者が集い，ヨーロッパと日本，それぞれの歴史，社会制度，文化，生活様式，宗教など，文明の諸側面について学際的（超領域的）な対話を行うことが目指された．

シンポジウムは 13 日午後に始まり，沓澤所長による開会挨拶の後，デンマーク高等教育科学省のP・グロネゴー氏による来賓挨拶と小講演があり，EU の高等教育政策 Erasmus+（エラスムス・プラス）と連動してデンマークの大学改革が進んでいる様子が簡潔に説明された．EU 域内ではこの 10 年間，学部生の留学だけでなく，大学院での学位取得や大学卒業後の就職まで含めて，流動性が急速に高まりつつある．デンマークでも EU 域内からの留学生は 2007 年から 2014 年の間に 4 倍以上に増えており，単位互換制度，教育内容，研究指導方法など，高等教育の各面で制度改革が進められているとのことであった．

講演の後，メイン企画であるシンポジウムが行われた．登壇者は平野葉一教授，沓澤宣賢教授，P・パンツァー教授（ボン大学名誉教授）の三名で，主に歴史的な観点から，文明対話を意識した発表がなされた．平野氏の発表は「A note on the possibility of “Civilization Dialogue”」と題し，科学史の立場から，科学の発展と自然認識の関係，およびその地域的な多様性について再考を促すものであった．沓澤氏の発表は「The Takenouchi misson and Western culture」と題し，幕末の遣欧使節団がヨーロッパの電信技術をいかに受容し，後の日本に普及させたかという点を扱っていた．パンツァー氏の発表は「European perceptions of Japan」と題し，文化交流史の観点から，19 世紀後半の明治初頭に訪日したヨーロッパ人が日本をどう見たか，貴重な写真資料に沿って解説するものだった．三氏とも，歴史的視点と文化間の交流を重視している点，ヨーロッパ中心ではなく地域的多様性を尊重して歴史を読み解こうとしている点で共通していた．各発表とも個別の論点が充実しており，「文明対話」という大きな問題意識に発する質問は少なかったが，欧日間の歴史的・文化的交流を焦点として噛み合った議論が展開され，質疑応答まで含めて充実したシンポジウムとなった．

翌 14 日は，基調講演，個別発表，ワークショップと続いた．基調講演は，文化心理学者のL・タテオ教授（オールボー大学）によるものであった．タテオ氏の主張は理論的に見て重要で，「文明」という概念のもとである事象をとらえよう

とするとき，人は必然的に「文明的でない何か」をその外部に立てるとともに，自己を「文明」の側に置いて世界を二分して理解してしまう，という我々の認識論的態度への批判を基調としていた（例えば，先進国の人々が途上国を暗黙のうちに未開とみなしてしまう，等）．しかし，人々の実践は文明と非・文明（あるいは自文化と異文化）のパースペクティヴが転換する両者の「緩衝地帯」でも多くなされているのであって，こうした実践に着目することが文明理解にとって基礎的な重要性を持つとタテオ氏は続けた．「文明対話」を主題とする国際シンポジウムにふさわしい内容の基調講演であった．

基調講演の後，若手研究者 3 名および本学の大学院生 2 名による個別発表があった．以下，簡潔に紹介する．⑴宮田奈奈氏（オーストリア国立アカデミー客員研究員）「European views on Japan in the 17th century」：17 世紀のドイツ語小説および脚本に表象された豊臣秀吉と日本についての分析．⑵服部泰氏（東海大学専任講師）「An essay on the tourist gaze」：マレーシアのサラワクにおける観光事業を題材に，観光まなざし論を再考し，持続可能な観光のあり方を模索．⑶鷹取勇希氏（東海大学非常勤講師）「Legitimacy of English domination and its relationship with linguistic and cultural diversity」：ポップカルチャーを通じて英語支配が広がりつつある現状の分析と，言語・文化的多様性の将来に関する展望．⑷日高彩乃氏（東海大学大学院生）「On Goethe's criticism to Newton's color theory」ゲーテの色彩論におけるニュートン光学への批判を分析し，両者の自然観の差異を指摘．⑸元治千明氏（東海大学大学院生）「The influence of Nihon-Shikki（Japanese lacquer ware）imported to Europe」：16 世紀以降ヨーロッパに日本漆器が持ち込まれ，Japanning と呼ばれる模造品が産出された歴史的過程の分析．こうして並べると，多くの発表がタテオ氏の言う「緩衝地帯」での実践に焦点を合わせており，文明研究の要点を踏まえた学際的な研究発表になっていたことが見て取れるだろう．

午後はワークショップが行われた．ワークショップは「East-West dialogue through the Body」と題し，私が自分自身の科研費プロジェクト「Embodied Human Science の構想と展開」の一部として企画した．仏教に由来するマインドフルネス瞑想に関心を寄せるD・フランチェスコーニ氏（ヴェローナ大学講師）と，ルネサンス期の画家デューラーの人体均衡論を専門とする中村朋子氏（東海大学非常勤講師）に発表を依頼し，そこに私自身の身体性と日本的自己についての発表を加え，身体性を軸に東西文化の対話を試みた．中村氏の発表は「The beauty of harmony」と題し，ウィトルウィウス的人体図に見られる理想的比率を持つ身体を論じるものであった．他方，フランチェスコーニ氏の発表は「Embodiment in education」と題し，瞑想を通じて心身の統合を追求する，ヨーロッパにおける新たな身体教育の実践を紹介するものであった．二人の発表は，それぞれ，客観的に観察される身体と主観的に知覚される身体を取り上げており，それ自体がヨーロッパ的身体観とアジア的身体観のコントラストを成しているようで興味深かった．身体観の違いを軸に，自己観や人間観の違いにも議論が及び，フロアからも活発な意見が述べられ，充実した企画となった．

二日間の内容はおおむね以上の通りであった．現地の参加者は，日本文化に関心を寄せる研究者や学生を中心として約 30 人で，そこに関係者が加わって全体の規模は 40 人程度であった．学術イベントとしての規模は決して大きくなかったが，互いに顔が見える距離感で，リラックスしつつも適度に緊張感のある議論が終始交わされていたように思う．次節以下の英文の特集では，7 件の発表内容を各自で論文化したものを収録した．二日間の国際シンポジウムにおける「文明対話」の一端をここから読み取っていただければ幸いである．

余談になるが，13 日夜にパリで大規模な同時多発テロが起きた．14 日は報道される事実関係について確認しながら関係者間で帰路を心配したり，基調講演のタテオ氏がこの件について言及する場面があったり，それを受けて休憩時間に参加者間でテロにかんする議論が生じたり，終了後の関係者の打ち上げでは現代文明とテロの関係について議論になったり…と，シンポジウムの裏側でも，テロをめぐって一種の「文明対話」が活発になされる二日間になった．

今回のシンポジウムでは，ヨーロッパ学術センターのスタッフ，招聘に応じていただいた先生方，運営委員会および文明研究所事務局の各位，若手研究者と大学院生の諸氏に大変お世話になった．この場を借りて厚くお礼を申し上げたい．